

万福寺

大谷派

山梨県山梨市下栗原

萬福寺

本願寺派

甲州市勝沼町等々力

親鸞聖人は相模国滞在中に、聖徳太子の御旧跡である萬福寺に参拝されたと伝えられている。萬福寺の開基は古く、『甲斐国志』によると、推古天皇6年(598)、聖徳太子27歳のとき甲斐国に訪れた際、甲斐国より献上された黒駒に乗り、等々力(甲州市)の地で休まれたことが縁となり、その後、『勝沼町誌』によると、推古天皇12年(604)に太子の命により、国司の秦河勝が創建したとある。以降の寺歴としては法相・天台・真言の三宗兼学の寺院であったと伝える。

安貞2年(1228)、親鸞聖人が甲斐国遊行の際に立寄られた際に、当時の住職であった源誓房覚信が帰依し、弟子となり真宗に改宗した。聖人に帰依した源誓とは、親鸞聖人関東の六老僧のひとりである。『萬福寺史』(本願寺派)には萬福寺の系譜が記載されており、真宗改宗後の1世は源誓房覚信、2世が源海房光信、3世が源誓房光寂とある。六老僧である源誓は「相模国オホハ(大庭)」の出身で、荒木門徒の祖である源海の弟子である。

親鸞聖人は甲斐国を去る際、源誓と源海を残し、その後、源海は武蔵国荒木に移り、門弟の光寂を萬福寺に招き興隆を託したと、『杉之御坊縁起』のなかに見える。

東西分派にあたり、萬福寺は西本願寺に属していたが、後の僧、存秀のとき東本願寺に傾き、その流れで山内の12坊を味方(東方)に付けてしまう争いが起きた。公裁の結果、存秀は山内の九坊と共に分かれ、当初、現在の富士吉田市に造寺し、後に下栗原(山梨市)の地に萬福寺を創建したのである。それが現在、東西両派に分かれている所以である。



騎乗の太子像 (万福寺所蔵)



源誓上人坐像 (萬福寺所蔵)



馬跡石 (萬福寺境内)